

高齢者にとっての世代間交流の意味—エイジング・パラドックスに着目して—

The significance of inter-generational interaction for elderly people:
from the Aging Paradox perspective

大学院総合生存学館 総合生存学専攻 氏名 鶴羽 愛里

学位論文内容要旨

超高齢社会において、高齢者の社会的孤立・孤独感が重要な社会課題の1つとして認識されている。孤独感は、主観的幸福感の阻害や健康状態の悪化に影響する心理的要因であることが知られる。孤立・孤独の対する解決策の1つとして、世代間交流が注目されている。本研究は、高齢者にとって世代間交流がどのような意味を持つのかについて明らかにすることを目的とした。

第1章では、高齢者研究におけるエイジング・パラドックスに着目し、関連する先行研究を概説した。エイジング・パラドックスとは、高齢期において親しい他者の喪失経験や身体・認知機能の低下などのネガティブな事象が増加するにも関わらず、主観的幸福感は維持される現象である。主観的幸福感には、経済的、健康的な側面に加えて、人間関係の側面も重要であるとされる。高齢者の人間関係の中でも若齢者との関わりは、次世代を確立させて導くことへの関心である世代継承性と関連することが知られる。一方で、認知機能の1つである記憶は、加齢の影響を受けるが、高齢者にとって同世代や異世代に関する記憶の脳内基盤の違いについては、明らかになっていない。

第2章では、所属する集団の違いについて着目し、内集団（同世代）と外集団（異世代）の他者との社会的相互作用によって記録された記憶の想起に関連する神経メカニズムとその加齢変化を明らかにすることを目的とした。磁気共鳴機能画像法（functional magnetic resonance imaging, fMRI）を用いて、健常若年成人と健常高齢者各36名に対して、2日間の認知神経科学実験を実施した。行動データから記憶成績、fMRIデータから脳賦活と脳機能的結合の3種類が得られた。同世代条件において、記憶成績、脳賦活、機能的結合のいずれも加齢による低下は認められなかった。一方で、異世代条件では、記憶成績、脳賦活、脳機能的結合のいずれにおいても加齢による低下が認められた。加齢による低下が認められたのは、記録時に単語をやり取りした異世代の人物を正しく想起した試行数、海馬と人物に関する社会的知識の処理に重要な右前部側頭葉領域の賦活量、右海馬と他者に対する社会的認知を反映する右上側頭溝後部領域との間の機能的結合、右前部側頭葉領域と右上側頭溝後部領域との間の機能的結合においてであった。これらのことから、情報源を想起する際、情報源が異世代の方が同世代よりも加齢による低下が起きやすいことが示唆された。また、脳・認知機能の低下にもかかわらず主観的幸福感が維持されたことは、エイジング・パラドックスに沿う結果であった。

第3章では、高齢者者の主観的幸福感に関連する心理行動要因について明らかにすることを目的とした。高齢者の主観的幸福感、次世代を確立させて導くことへの関心である世代継承性との関連することが知られるが、世代別の交流頻度や困難時の適応方略と主観的幸福感の関係を高齢者で調べた研究はない。主観的幸福感には、世代継承性とより若い世代との交流頻度が関係することを仮説とし、主観的幸福感に関連が予想される他の要因（主観的経済状況、主観的健康状態、コーピング・スタイル（肯定的解釈・気晴らし））を含め、100名の高齢者に質問紙調査を実施した。主観的幸福感に対する要因の関連性を重回帰分析にて検討した結果、世代継承性が最も強く主観的幸福感を予測し、異世代との交流頻度、主観的経済状況、肯定的解釈も有意に予測したが、主観的健康状態と気ばらしは有意に予測しなかつ

た。このことから、高齢者の主観的幸福感を予測する心理行動要因として、世代継承性だけでなく、異世代との交流頻度、肯定的解釈のコピーング・スタイルも重要であることが示唆された。

第4章では、長期的な世代間交流である異世代ホームシェアを通じた学び合いが、孤立・孤独の解決策となりうる可能性について、得られた知見から検討することを目的とした。本章は、日本ホームシェア会議事務局と京都大学大学院総合生存学館（共同開催）および京都府建設交通部住宅課・京都市都市計画局住宅室住宅政策課（協力）のもと実施した **Project Based Research (PBR)** に着目し、ワーキング・ペーパーを再編し検討を行った。得られた知見から、異世代ホームシェアは、高齢者とより若い世代との学び合いを通じて、次世代や地域社会に対する社会的孤立・孤独解決の利益提供者として活躍できる可能性が示された。

第5章では、得られた知見から、高齢者にとっての世代間交流の意味を多角的に検討した。高齢者において、異世代条件では、記憶成績、脳賦活、脳機能的結合のいずれにおいても加齢による低下が認められたが、主観的幸福感が維持されたことは、エイジング・パラドックスに沿う結果であった。この加齢依存的な特徴について互いに理解しコミュニケーションをとることが重要となる。加えて、主観的幸福感の向上には、世代間交流の有無だけではなくその頻度も重要であることから、定期的な世代間交流が望まれる。これらの学術的知見に加えて、社会実装（PBR）の知見から、孤立・孤独対策として、長期的な世代間交流の一例である異世代ホームシェアは、相互学習を通じて、高齢者だけでなく、次世代や地域社会に対してもポジティブな影響をもたらす利益提供者の役割を担う可能性が示された。本研究で得られた知見は、孤立・孤独の解決および、主観的幸福感のより高い超高齢社会の実現に向けて示唆を与えるものである。